

先進国は、2050年までに環境負荷を1/8に低減する必要がある。 その認識に基づいて行動計画を策定、環境経営を推進しています。

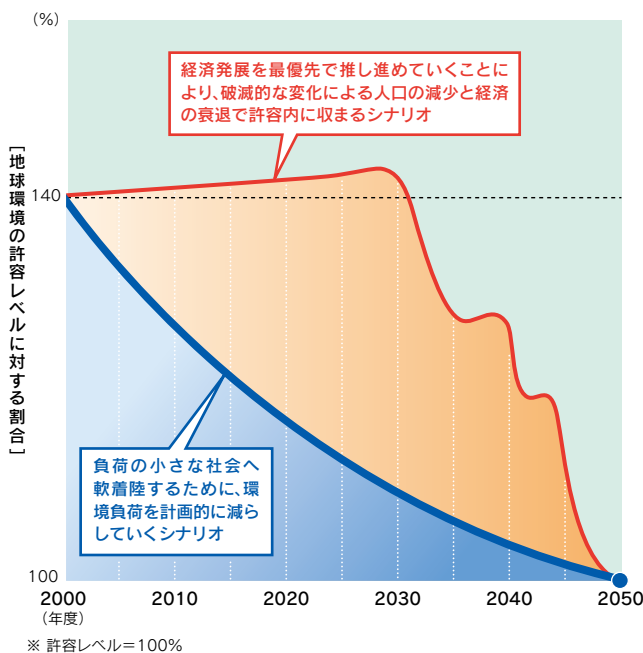
長期的なビジョンに基づいた 取り組みの重要性

地球環境を保全し、持続可能な社会を実現するために、私たちは、人間社会から発生する環境負荷を地球の再生能力の範囲内に抑える必要があります。そのためには、まず地球環境と人間社会の将来における「目指す姿」を描き、それに向けた長期的なビジョンを設定した上で、活動を推進していかなければなりません。なぜなら、地球環境保全はやり直しのきかない課題であり、短期的な視点で行動しては成果が得られない可能性が高いからです。そこで、リコーグループは、2005年度にスタートした環境行動計画の策定に際して、さまざまな情報を収集・分析して2050年の社会状況を想定し、それがリコーグループの事業にどのように影響するかを検討しました。その結果、私たちは、先進国は2050年に環境負荷を現在の1/8にする必要があるという「超長期環境ビジョン」のもと、具体的な行動計画を立てていく必要があると考えました。

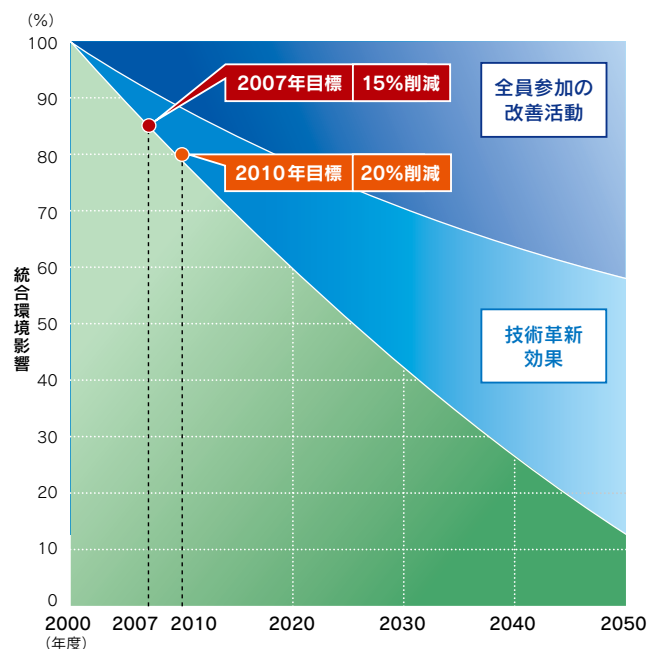
2050年に向けた 社会の変化とリコーグループの対応

2050年には、社会はどのように変化しているでしょう。世界の人口は90億人に増加し、金属資源の枯渇や土地利用の制限が起きる一方、温暖化防止に向けて石油からのエネルギー転換などが進み、これまでの社会モデルやビジネスモデルは大きく変化せざるを得なくなるでしょう。リコーグループでは、これまでのようにバージン材料や化石資源をふんだんに使うことができなくなることに備え、資源投入量を削減する環境技術開発や石油に代わる製品素材の実用化などを推進しています。このように、将来起こる社会の変化を認識し、事業への影響を想定した上で、それに備えるための現在行うべき対策として設定しているのが「環境行動計画」です。私たちは、大きく変化していく社会にいち早く対応し、自ら変化していくことが、企業競争力の強化につながると考えています。

地球の環境負荷が削減される二つの世界(シナリオ)



統合環境影響の削減目標

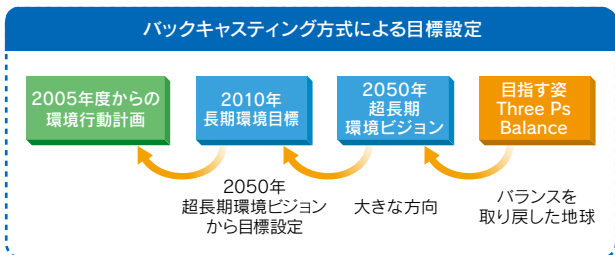


目指す姿に向けて 「バックカスティング方式」で目標設定

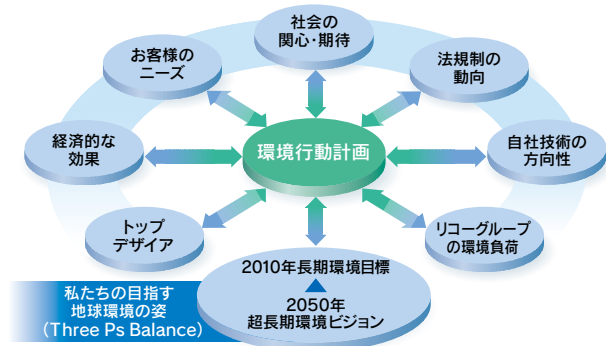
リコーグループでは目標設定の手法として、まず最終的に目指す姿を想定し、その実現に向けた通過点として目標値を設定していくという「バックカスティング方式」を採用しています。最終的に目指す姿として「Three Ps Balance」を掲げ、2050年の「超長期環境ビジョン」を描いた上で、2010年度までに環境負荷をまず20%削減するという「2010年長期環境目標」を設定しました。これに基づ

いて、2005年度にスタートした「環境行動計画」では、年率8%以上の事業の拡大を前提として2007年度までに環境負荷を15%削減するという目標に取り組んでいます。目標値には、「統合環境影響*」という指標を採用し、これを絶対値で削減することを目指しています。「統合環境影響」とは、CO₂の排出、資源利用や化学物質の使用などによる環境負荷を統合化したものです。 *: 54ページ

環境目標の設定方法



環境行動計画策定時の配慮事項



OPINION

有識者に聞く① WWF ジャパン 様

リコーグループの環境経営の一貫性を世に問う材料に

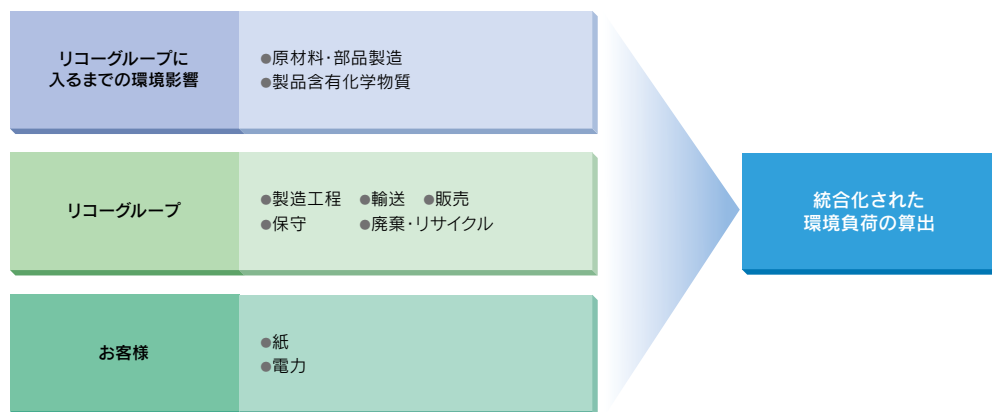
リコーの超長期環境ビジョンが評価できるのは、地球環境が置かれる将来を予測し、バックカスティング方式で中期に必要な環境保全目標を立てるという手法を採用している点です。将来予測を立てるためには、ライフサイクル全体に目を配り、総体として環境負荷を把握するので、有害化学物質は減っても温室効果ガス排出は増えてしまうような、「一面的な”環境保全”対策」を回避する視野が確立されます。また対策が効果を上げるためのリードタイムも、バックカスティングによって着実に確保されるため、予防原則に則った計画立案が可能になります。これは時代を先取りした環境技術開発を促すことにも繋がるでしょう。2050年という長期視点に立って描かれたビジョンであり、リコーの環境経営の一貫性を今後も世に問う材料となるに違いありません。そのためにも、外部専門家への諮問などで新たな科学的知見を取り入れた見直しを適宜行い、地球環境の現実との整合性を求め続けていただきたいと思います。

「事業活動全体」の環境負荷を「絶対値」で削減

CO₂の削減や資源の節約などの活動を単独で進めていった場合、その分野での環境負荷削減は達成したものの、そのために他の分野やプロセスでそれ以上の環境負荷が発生していた、ということが起こる場合があります。そのため、環境負荷を確実に削減するためには、まず事業活動全体で発生している環境負荷をとらえうえて、工程ごとにどのように活動を進めていくべきかを総合的に判断することが重要と

なります。また、原単位やファクターなどの効率に基づいた相対的な指標による目標設定のみでは、実質的な地球環境保全につながらない可能性があるため、環境負荷の「絶対値」で削減目標を設定することも重要です。リコーグループが、事業活動全体の「統合環境影響」を絶対値で削減することを目標にしているのは、このような考え方に基づくものです。

環境負荷の削減領域(エコバランス)



OPINION

有識者に聞く②

東京大学 AGS推進室 様

※ AGS (Alliance for Global Sustainability)

グローバルなビジョンのもと、責任を果たすことが世界規模の持続可能性にとって必須

将来の社会とそこで求められるサービスを出発点として、バックカスティングによる行動計画策定という環境経営の考え方は、自らを管理しながら目標を達成する仕組みを内在していることに特徴があり、高く評価されます。一層の省エネ機器を開発・販売するという生活者の目からみても、分かりやすい具体的な環境行動計画へと展開する説明は貴重です。リコーグループは巨大な社会システムの中ではやはりその直接的影響は限定されますが、各個人、企業、あるいは国家が、グローバルなビジョンのもとに各々の責任を果たすことが、地球規模の持続可能性にとって必須であるということを、説得力をもって主張していただければと希望します。また、バックカスティングで示される目的地に至るまでの道筋と現在事業として進みつつある道筋をどの程度の時間をかけて連結していくかが今後の課題であり、方向は同じとしても一段高い道へのジャンプも必要となり、期待しています。 <http://www.globalsustainability.jp/jp/top.php>

**目指す姿を環境経営のレベルで実現し、
社会全体の環境負荷低減にも貢献**

長期的視点に立ち、環境負荷を地球の再生能力の範囲内に抑えることを前提として、継続的に環境負荷低減に取り組むには、環境保全活動を通して経済価値を創出する「環境経営」を推進し、企業として存続・発展していく必要があります。リコーグループの環境への取り組みには3つの段階がありました。「環境対応」、「環境保全」を経て、現在は「環境経営」を目指

す段階にあります。「環境対応」の段階では、法規制や他社動向などの外圧に応じた受け身の活動でした。「環境保全」の段階では、地球市民として使命感をもって取り組むようになり、事業や製品の環境負荷を低減するための対策を自主的に実施しました。現在は「環境経営」の実現を目指して、「全員参加の活動」と「環境技術開発」で、事業活動の環境負荷低減と経済価値の創出を同時に追求しています。また環境技術開発の分野においては、現在のリコーグループの事業領域にとどまることなく、社会全体の環境負荷低減に貢献していきます。

環境保全活動の3ステップ(環境対応から環境保全、そして環境経営へ)

	環境対応	環境保全	環境経営
狙い(コンセプト)	圧力への対応 ・法規制 ・競合 ・お客様	地球市民としての使命 ・自主責任 ・自主計画 ・自主活動	環境保全と利益創出の 同時実現
活動内容	法規制、競合、 お客様に追随した 消極的な活動	1.高い目標を掲げた積極的な 地球環境負荷低減活動 ・省エネルギー ・省資源リサイクル ・汚染予防 2.社員一人ひとりの意識改革	環境保全活動 ≒QCD活動* 例) 部品点数削減 工程数削減 歩留り、稼働率向上
ツール		1.ISO14001 2.LCA 3.環境ボランティアリーダー 養成プログラム	1.戦略的目標管理制度 2.環境会計 3.環境経営情報システム

* 品質 (Quality)、コスト (Cost)、納期 (Delivery) の管理改善活動。

OPINION

有識者に聞く③ 独立行政法人 物質・材料研究機構 工学博士 原田 幸明 様

世界を牽引していくためには、長期計画などでより進んだ設定も検討が必要

バックキャスト方式を導入し2050年のあるべき姿から2010年、2007年などの長期および各次の目標を設定したことは、地球温暖化や資源疲弊などの地球環境問題に対して社会に責任を持つ構成員として能動的に 대응していくひとつのかたちを作ったものとして大きく評価できます。すなわち、従来の「環境配慮」としての受動的責任、「トップランナー」としての相対的責任から、解決能力を持つ社会的当事者へと進化していることを意味しており、他の企業もこのような観点からの目標設定を始めてほしいと思います。しかし、先進ゆえの問題も散見されます。特に1/8という設定は、2050年の予測から導き出されたもので基本的に妥当なものですが、これは世界がそのレベルにならねばならないという予測であり、リコーのような先進企業が予測される世界平均のレベルで満足してよいのかは疑問もあります。世界を牽引していくためには長期計画などでより進んだ設定も検討が必要ではないでしょうか。